

---

# ハヤテになっちゃった!?

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテになっちゃった!?

### 【Nコード】

N9475E

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

その日、目が覚めると、ヒナギクはハヤテになっていた。その原因は、ある少女が握っていて……

(前書き)

何の目的もなく書いたもの。駄作かもしれないorz・・・

それは、唐突に起こった。

その日、私こと桂かつら 雛菊ヒナギクが目を覚ますと、見慣れない部屋に居た。ふと横の壁を見ると、気になるあの人が普段着ている服が掛かっていた。

もしかして、此処って彼の？

私はそう思いながら、ベッドから降りて体を改めた。

男用の寝巻きを着ている。

私は取り敢えず、着ているものを脱いで、壁に掛かっている執事服に着替え、寝巻きを畳んでベッドに乗せて部屋を出た。すると、廊下が左右に伸びていた。

お手洗いはどっちかしら？ そう思ったところで、ホワイトタイガーが現れた。

この虎は見た事がある。確か、この屋敷の主のペット。名前はタマだったか。

「おはよう、タマ」

そう挨拶してみると、タマに押し倒されてしまった。

「何がおはようだ、この借金執事！？ お嬢はとっくに起きてるぞ！」

「……………」  
言葉が見付からない。て言うか、虎が喋ってるし。

「何だ、驚いた顔して？」

えっと、虎に敬語は流石に無いわよね。

私はそう判断すると、普通に話すことにした。

「お嬢様が僕より早く起きてるって言うからちよっと驚いただけだよ」

ていうか退け そう言って私はタマを退かして立ち上がった。

「あ、そうだ。トイレどっちだっけ？」

「寝惚けてんのか、お前？ トイレならあっちだ」

タマはそう言って私の後ろを指差した。

「有り難うな、タマ」

私はタマの頭を撫でると、その方向へ掛けていった。

後ろの方でタマが、「何だ、あいつ？」と首を傾げる。

それから暫く行ったところで、TOILETと書かれたプレートが貼られた扉を見付けた。

限界を感じていた私は、一秒でも早く済まそうと、その扉を一気に開け放った。すると、中でメイドさんが座って驚いた顔をしていた。

「マリアさん、居るなら鍵くら」

そこまで言ったところで、「きゃあああああああ　っ！」と

マリアさんが悲鳴を上げてスリッパを投げてきた。私は避ける間もなく、それを顔面に喰らった。

「は、早く閉めて下さい！」

「は、はい！」

私は慌ててドアを閉めた。

それから暫くして、水の流れる音が聞こえ、マリアさんがドアを開けて出て来た。

「全く、ノックぐらいして下さい。このトイレは今、鍵が壊れてるんですから、今度からは気を付けて下さいね」

マリアさんはそう言うのと、そそくさと去っていった。

それと入れ替わりに、金髪ツインテールの少女が現れて声を掛けてきた。

「今日はいつもより遅いな、ハヤテ」

彼女の名前は三千院さんぜんいん 凪ナギ。この屋敷の主で、私のクラスメイトである。

なんて紹介をしてる間に、私が入ろうとしていたトイレへナギが入ってしまった。

「ちょっと、お嬢様！」

ドアを叩く私。

「何だ、騒々しい！」

「僕が入ろうと思ったんですよ！」

「早いもの勝ちだな」

「も、漏れそうなんですけど」

「私はでかいのをやるから当分の間は出られない。我慢出来ないなら大浴場のを使い」

「解りました」

とは言うものの、大浴場ってどっちにあるのよ!?

そこで私は、ナギに訊ねてみることにした。

「ところでお嬢様。大浴場ってどっちでしたっけ？」

「何だ、忘れたのか。お前が扉の方を向いているなら左だ」

「有り難う御座います、お嬢様」

私は言われた通りの方向へ駆け出した。

それから暫く行ったところで、それっぽい扉を見付けて中に入り、もう一つのトイレを発見して駆け込んだ。

私はズボンのチャックを下げ、中から一物を引っ張り出した。

こ、これが彼の息子……。

私はそれを少し弄ってみようと考えたが、そんなことしてる暇などない事を思い出して排尿をした。

何年ぶりかしら、立ち小便？ 確か、3歳の時に一回だけやったのが最初で最後ね。その後は皮下脂肪が付いて前に飛ばなくなったのよね。

そんな昔の思い出に浸っていると、排尿は終わっていた。

私は水を流し、トイレから出て手を洗い、食事を取る為に食堂を探した。そして、30分経過したところで漸く見付かった。

中に入ると、マリアさんが朝食の後片付けをしていた。

「あら、ハヤテくん。まだ居たんですか？ ナギはとっくに学校へ行きましたよ」

その言葉に私は時計を探した。

「因みに、もう9時を過ぎてます」

「ええええええええ　っ！」

私は驚いて叫んだ。

どうしよう？　完全に遅刻だわ。

私は焦ると、慌てて彼の部屋へ戻り、鞆を持って屋敷を出て学校まで駆け出した。

その途中、私は動物園から逃げ出してきたライオンに数時間ほど追い掛け回され、結局学校に着いたのはお昼休みを迎えてからだった。

何で？　何で今日はこんなに運が悪いの？

私が校庭でそう嘆いていると、「誰か、助けて」という声が聞こえてきた。

辺りを見渡すと、木の上で桃色長髪の少女が幹にしがみついていた。

彼女が本来の私の姿。という事は、中身はきっと彼女だ。

「ちよつとハヤテくん！？　見てないで助けてよ！」

いや、彼ならそんなこと言わないし、自分で降りるだろう。では、

あの娘は一体？

「もういい。飛び下りるからちやんと受け止めて」

少女はそう言って跳んだ。

「ちよ、ちよつと待って！」

私は慌てて彼女の落下地点に移動した。

「おぶっ！」

顔を踏まれる私。

「ちよつと、何で受け止めてくれないのよ！？」

「急なことだったからちよつと……。て言うか、1限からずっと上に居たんですか？」

「う、五月蠅い！」

そう言って、雛菊は去っていく。

「待って下さい」

私は咄嗟に引き留めた。

「何よ？」

「お昼、一緒に食べませんか？」

「有り難う。でも今日は美希と食べる約束してるから」

じゃあね　と校舎へ駆けていく雛菊。

仕方ない。一人で……。

そう思った時、校舎からナギが出て来て、「ハヤテ、帰るぞ！」と私を横切っていく。

しかし、私はそれを無視して校舎へ向かった。

昇降口で上履きに履き替えて2年の教室を目指す。

教室に着き、教卓の前の2列目に鞆を置く。

「ハヤ太くん、遅いね」

二八八、と笑いながら現れた少女は、名を瀬川<sup>せがわ</sup>泉<sup>いずみ</sup>。その横で、

何やら不適な笑みを浮かべている大人びた少女、朝風<sup>あさかぜ</sup>理沙<sup>りさ</sup>。

「何か用ですか？」

「実はハヤ太くんに頼みたい事があるんだ」

理沙はそう言うと、美希と弁当を食べていた雛菊を見た。

「ちよつと廊下に出ようか」

私は理沙に廊下へ連れ出された。

「で、頼みたい事って何ですか？」

その問いに、二人は暗い顔を見ると、泉が私のお気に入りマグカップを取り出した。が、それは真つ二つに割れていた。

「……………」

私は無言で二人を睨め付けた。

「な、何かハヤ太くんが怒ってるぞ。危険だ、逃げよう！」

理沙はそう言うと、泉を置き去りにした。

「理沙ちゃん、待ってよ」

追い掛けようとする泉の腕を掴んで引き留める私。

「どうしてマグカップを割ったんですか？」

「ハヤ太くんには関係ないよ」

泉は私の手を振り解くと、一目散に逃げていった。

あの二人、元に戻ったら絶対ボコボコにしてやるんだから！

「綾崎！」

後ろから聞き覚えのある声があった。振り返ると、執事服を身に纏った男、瀬川 虎鉄が居た。泉の兄である彼は、いつもハヤテくんの事を追い掛け回している変態くん。

その彼が、「愛してるぞ！」と私に向かって飛び込んでくる。

私は咄嗟に避けた。

「うおっ！？」

飛び込みの勢いで廊下を転がる虎鉄くん。

「大丈夫ですか？」

別に心配している訳ではないが、取り敢えずそう訊いておく。

「綾崎、お前は どうしていつも俺を避けるんだ！？」

虎鉄くんが起き上がり様に私の足に抱き付く。

「離れるよ！」

私は怒鳴りつけると、虎鉄くんの髪の毛を引っ張った。

「お前が何と言おうと、俺はこの手を放さない！」

仕方がない、こうなったら正宗を！

私はいつものように右手を上げて召喚しようとしたが、正宗はやって来なかった。

何か無いか、そう思いながら懐を探ると、物騒なものが出て来た。

それは、ごく一部の人間にしか所持を許されていない武器だった。

私をそれを、虎鉄くんの頭に当てた。

「離れないと撃ちますよ？」

すると虎鉄くんは慌てて距離を取って両手を挙げた。

「ど、どうしてそんな物を持つてるんだ！？」

何で持つてんだらう？ 護身用……って訳でも無さそうだし。

「お前、言っておくけど、銃刀法違反だぞ！」

「解ってますよ、そのぐらい」

私はそう言うと、物騒なものを懐に仕舞った。

「それより、お金下さい。僕の財布、12円しか入っていないんです。財布を取り出し、本当に12円しかないと確認させる。」

「しょうがない奴だな。いくら欲しいんだ？」

「1億5千6百80万4千円」

「そんな大金持ち歩いてないわ！」

「冗談ですよ。500円です、それだけ下さい」

「500円な」

虎鉄くんは財布を取り出すと、500円玉を取り出して私に差し出す。

私はそれを受け取り、自分の、というかハヤテくんの財布に入れて仕舞った。

「では僕は食堂へ行くので、これで失礼します」

私はそう言うのと食堂に移動した。

その途中、ポケットに入れてある携帯が鳴り、私は応答した。

「ハヤテくん、どうしてナギを一人にしておくんですか！？ 誘拐されたら困るでしょ！」

マリアさんの怒鳴り声。私は咄嗟に、耳からスピーカーを遠ざけた。

「大丈夫ですよ、マリアさん。僕が居なくても、あの娘にはハヤテくんが」

付いてますから、そう言おうとしたところで、自分が彼であることを思い出す。

「はあ？ あなた、ちょっと変ですよ。精神科医にでも行かれた方がいいのでは？」

「そうですね。では、帰り掛けに寄って行きます」

私はそう言うと、電話を切った。……って、校則違反してるし。

辺りを見渡し、誰も居ないことを確認すると、直ぐに携帯を仕舞って歩き出した。

すると私は呼び止められた。

「綾崎くん」

足を止めて振り返ると、眼鏡を掛けたネズミ色の髪の毛の少女が立っていた。

彼女は春風はるかぜ 千桜ちばる。生徒会役員で書記をやっている。愛称はハル子。

「何ですか、春風さん？」

「こ、これを」

ハル子は赤面しながら持っていた封筒を私に押し付けて去っていった。

何だろう、そう思いながら中から紙を取り出して開いてみると、涙の出るような文が書かれていた。

私は目に涙を浮かべながら思った。

ハル子、ハヤテくんのことそんなに思ってたのね。……うん、解った。ハヤテくんはハル子にあげる。

私は手紙を仕舞うと、再び食堂へ向かおうとした。しかしチャイムが鳴り。

昼休みが。

終わった。

そ、そんな！ まだお昼食べてないわよ！？ 神様、時間を戻して！

そう思っても、私の願いは神には届かない。私は仕方なく、空腹のまま教室へ戻った。

放課後、校舎を出ようとすると、雛菊に呼び止められた。

「ハヤテくん」

私は振り返り、「何ですか？」と訊ねる。

「今日、一緒に帰ってもいいかな？」

「ええ、別に良いですけど」

何だろう、私から誘うなんて。

「じゃあ行くこうか」

雛菊はそう言っつて、靴を履き替えて私を横切っていく。

「ブーツとしてると置いていくわよ」

「あ、はい」

私は雛菊の横に着いた。

「あの、ヒナギクさん」

「ん？」

「僕を誘ったのには何か訳があるんですよね？」

「いや、特に理由はないわ。ただ……」

「……………」

何やら深刻そうな表情をする雛菊を見て私は疑問符を浮かべた。

「私ね、死期が迫ってるの」

「えっ？」

「どういうこと？　そう訊ねる私。」

「実は今朝、私の下に死神がやってきて言ったの。『お前は今日、交通事故で死ぬ』って。勿論、最初は信じなかったわ。でも、死神の言うこと、全部当たって……。だから、最期は好きな人と一緒に居ようと思っつて」

「……………」

私は言葉を失った。

「ごめんね、こんな話ししちゃって」

雛菊はそう言っつと、黙りこくつてしまった。

私は、彼女に何をしてあげればいいのかだろうか。

「ヒナギクさん！」

「……………」

無言で振り返る雛菊。

「あの、今から僕と、デートしませんか？」

その問いに雛菊は無言で頷いた。

「じゃあ何処へ行きます？　お金が無いから遠い所は無理ですけど」

「は、ハヤテくんの行きたい所へ連れて行って欲しいな」

「では商店街を回りましょう」

「うん」

私は雛菊を連れて商店街へ行った。

「見て下さい、あれ」

そう言っただけで私が指を差したのは、ある店が出し物として行っているヒーローショーだった。

昆虫型のヒーローが昆虫型の敵と戦う、そんなやつだ。

「懐かしいわ。あれ、2年前にテレビでやってた仮面ライダーカトよ」

そう言っただけで雛菊が近くまで寄った。

やがて、ショーが終わり、夕方を迎える。

「面白かったわ。次は何処に行く？」

その問いに私は首を左右に振るった。

「すみません、もう遅いので帰らないと」

「……そっか。じゃあお別れだね」

バイバイ　そう言っただけで手を振りながら去っていく雛菊。私はそれを追い掛けた。

「待って下さい。家まで送ります」

「有り難う。でも、ハヤテくん私の死に際なんか見せたくないから一人で帰るわ」

「何を言ってるんです。最期まで居るって約束したじゃないですか。僕、此処でヒナギクさんと別れたら、絶対に後悔すると思うんです。だから、家まで送らせて下さい」

「ハヤテくん……。……。解った。最期まで一緒に居る」

私たちは、桂家へ向かった。

その途中、道の真ん中で遊んでいる子どもを見つけた私は、その子どもにも注意しようと近付いた。すると、その子は消えてしまった。「ダメ　ッ！」

雛菊がそう叫んで私を突き飛ばした。そして、横から来たダンプカーに撥ねられて数メートル先の路面に落下した。

ダンプカーは止まる様子もなく、そのまま行ってしまった。私は

慌てて雛菊に駆け寄った。

撥ねられた衝撃で、血で真っ赤に染まった体内臓器が口から飛び出している。

「ハヤ……テ……くん……」

雛菊が苦しそうに口を開く。

「今日は……楽し……かった……。有り難う」

そこで彼女の意識が無くなる。

「ちよつと!?! 起きてよ! せめて私を元に戻してからにしないよ!」

私がそう叫んだ瞬間、辺りが漆黒の闇に包まれ、金髪縦ロールの少女が現れた。

「あなた、まだ気付いてないみたいね」

「えっ?」

「あなたは作られた存在なの」

「どういうこと?」

「あなたはそこに倒れている娘の魂をコピーしたクローン。ソウルクローンってところかしら」

「ソウルクローン?」

「その娘には死期が近付いていた。だから私は、ある実験を行った。そして出来たのが、あなたって訳」

「要約すると、私は桂 雛菊ではない、と」

「そう」

「じゃあこの体は?」

「それはあなたが一番よく知ってる。私は借りただけだから」

少女はそう言うのと去っていく。

「待って。私、この体から出たいの。あなたが私を作ったんなら」

「そこまで言ったところで、少女が掻き消すように答えた。

「無理よ。代わりの体があれば直ぐにでも移すけど……」

ところで 続ける少女。

「私、天王州 アテネ。人の魂を使ったある実験をしてるんだけど、協力してくれない？ もし力を貸してくれたら、新しい体を作つてあげる」

どうする？ と訊ねてくる少女、アテネ。

「協力するわ。このままハヤテくんを乗っ取つたままなんて嫌だから」

「そう。付いてきて」

アテネが言うと、目の前に大きな城が出現した。

この中に一体、何があるのだろうか？

私は本当にこの体から出られるのだろうか。そんなことを思いながら、私は城の中へと入っていった。

(後書き)

取り敢えず今回はここまで。ヒナギクはハヤテの体から離れられるのか、次回作にご期待下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9475e/>

---

ハヤテになっちゃった!?

2010年10月8日10時31分発行